

洋ランの育て方

洋ランの原産地——花の美しい種類や形の珍しい種類は、東南アジアの大陸・島々、中南米の熱帯地方とその高地です。

東南アジア産——パフィオペディラム、デンドロビュウム、シンビディウム、バンダ、ファレノプシス

中南米産——カトレア、レリア、オンシジウム、ミルトニア、オドントグロッサム、エビデンドラム

地生種——普通の草花と同じように、地中に根をのばして育つ種類です。(パフィオペディラム、シンビディウム等)

着生種——樹木や岩石にくっついて育つ種類で、根は、植物の体を支えるはたらきをしています。(デンドロビュウム、カトレア、ファレノプシス、バンダ等)

育て方

植込み材料——水ゴケ、パーク(木の皮)、ヘゴ(シダの根)、軽石の礫等、通気・排水のよい材料

温度——(冬の最低温度)低温種 10℃(パフィオ、シンビ、デンドロ)。中温種 15℃(カトレア、オンシジウム、レリア)。高温種 18℃(ファレノ、バンダ)

光——冬は100%当てる。春と秋は80%、夏は50%しゃ光し、日やけを防止します。

水——着生種は、1度たっぷりを与え、次に乾いてから、またたっぷりを与えます。(過湿の常時は厳禁)

地生種は、あまり乾かないうちに与えます。

※季節によるかん水の注意——冬は少なめに、回数も少なく。春から夏の新芽の生長期には多めに与えます。(ただし、休眠中の株は少なめにします。)

湿度——空中の湿度は、70~80%をめやすに保つようにします。あまり湿度が低い時には、加湿器を使用します。

通気——通気のよいところに育っている種類が多いので、湿気を保ちながら通気をはかります。(通路、棚下、散水等を一考)

施肥——新芽の生長期だけ、ハイポネックス液肥(1,000~2,000倍)を週1~2回かん水と同時に施します。

シンビディウムは、3月下旬~6月下旬まで、毎月1回

定期的に、油かすを茶さじ山盛り2杯程度を施します。他のランは、多肥に弱いので、できるだけ少なめに施します。良い環境で育てれば、肥料がなくてもよく育ちます。

温室がなくても、洋ランは育てられる

デンドロビュウム、シンビディウム——晩霜のなくなる頃から、秋の降霜期まで戸外にだし、日光によく当てて栽培します。シンビは地上20~30cmの棚上に、デンドロは1m以上の棚上か物干につるしておきます。冬は廊下で栽培します。

カトレア、オンシ、パフィオ——春の晩霜がなくなり、気温が10℃(夜)以上になったら、戸外に出し、半日かげの棚上で栽培し、10月中旬には家の中に入れます。日中の日光にはよく当て、夜間は、ダンボール箱等で10℃に保温します。冬は、ヒヨコ電球等で加温する程度で充分です。

バンダ、ファレノプシス——6月~10月上旬まで、戸外に出し、半日かげの棚上で栽培します。他の季節は、廊下のワーデアンケース(ビニール製の小温室でも可)を利用し、日光によく当て、夜間は15℃~20℃に加温します。

洋ランを开花させるコツ

- ① 日やけを起さない程度の日光をよく当てます。
- ② 通気、排水のよい材料で植え、適当なかん水をします。
- ③ 肥料は少なめに、生長期だけ施します。
- ④ 株分けは、できるだけ止め、大株づくりにします。
- ⑤ 花後に植かえをします。株に対して小さめの鉢に排水が良いように植えます。

花芽のできる条件

デンドロビュウムのノビル型——秋の低温に充分当てます。日光にはよく当てて育てます。

シンビディウム——葉の枚数を多くするように育て、日光によく当て秋の低温によく当てます。

昭和53年度 催し物展

洋ラン展

昭和53年11月15日(水)

}

昭和53年11月19日(日)

山形県立博物館
協力 山形蘭友会

開催にあたって

洋ランの栽培について関心が高まっています。意外なことに、本県には洋ランを専門的に栽培している方々が、たくさんおり、愛好者をも含めると、かなりの数にのぼります。しかし、冬期の長い本県では、必ずしも満足のいく栽培がなされているとはいいたいがたいようです。

本館では、今回も、山形蘭友会(中村三郎会長)の会員が丹精こめて栽培した、洋ランの鉢植、200鉢の出品協力をえて、洋ランの生態と栽培するための基本技術を知り、あわせて洋ランの美と神秘をさぐるために、「洋ラン展」を開催いたします。

短い期間でするので、お見逃しなく、おさそい合せの上、多数ご来館くださるようご案内申し上げます。

山形県立博物館長

洋ランについて

ラン科植物は、約700属25,000種以上が、南北の寒帯や砂漠地帯を除いた、全世界に分布しています。わが国に産するシュンランやカンラン、中国に産するシナシュンランや一茎九華などは、一般に東洋ランと呼ばれています。

洋ランというのは、明治の中頃、主としてイギリス等より輸入され栽培されるようになった熱帯産のラン科植物を総称して呼んでいます。洋ランには、主として熱帯アジア、中南米等に産する各種のランの原種と、それ等の原種がヨーロッパ、特にイギリスに輸入され、今より約100年前頃より人工で、種々交配された交配種とがあります。

したがって、その花の形、花の色彩、開花期等は、すこぶる変化に富み、趣味の栽培の対象として大変興味のあるものです。わが国では、初めきわめて一部の人々の間でのみ栽培され観賞されていたに過ぎませんが、昭和25年頃から、一般に広く親しまれるようになってきたようです。

洋ランが、初めてわが国に紹介されてから、すでに60年以上の月日を経過しているのに、なぜ、一般に普及するのが遅れたのでしょうか。その理由に考えられるのは

1. 洋ランは、栽培が大変困難であるという誤った先入観をもっている。
 2. 高価で、また栽培に経費がかかり過ぎ、一部の人々を除けば手が出せないという誤解がある。
- などが主な原因として考えられます。

第1の点は、実際に栽培してみると、案外やさしいもので、ただ洋ランの好む環境さえ作ってやれば、かなり放任的な栽培でも、結構花が開き、楽しむことができます。

第2の点は、洋ランの種類によって、大変高価なものもありますが、初めての趣味の栽培には、そんなに高級品種は無用なことです。

ただ洋ランは、熱帯、亜熱帯産のもので、冬は、加温設備のあるところで越冬させなければなりません。そのためには温室が必要ですが、洋ランの種類や鉢数が少なければフレーム（簡易）でも栽培できます。

洋ランの形態

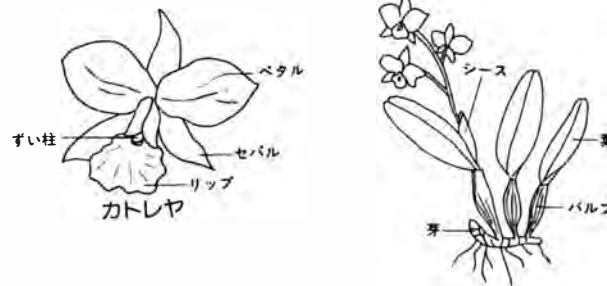
ランの形態は、さまざまですが、基本的には、ファレノプシス、バンダ等のように、一本の茎が毎年連続してのびる単茎性と、カトレア、デンドロビウムのように、根茎から分枝してのびる複茎性のものに分けられます。

また、生態的には、木や岩に付着する着生ランと、地面に生える地生ランの別があります。着生ランは普通、貯水組織をもつ厚い葉と茎をもち、肥大した茎はバルブと呼ばれています。

花は、一見、ユリの花の花片が一枚変化した形ですが、ずい柱といって、雄ずいと雌ずいがいっしょになった、独得の器官があります。また、虫媒花ですから、構造も複雑で、どんな昆虫を相手にするのか不思議なしくみをもった花もたくさんあります。

花の部分名称

- セパル — かく片。上のをドーサルまたはアップーセパル、下のをローワーセパル。
- ベタル — 左右2枚の花片。
- リップ — しん片。最も変異のある花片。
- スパー — 距。しん片の後の部分が管状になったもの。
- ステム — 花茎。
- シース — 花鞘。
- バルブ — 偽球茎。



栽培されている洋ラン

カトレア (Cattleya)

洋ランの代名詞のように有名で、洋ランの女王です。中南米に分布し、その花は、美しく大輪で、普通は紅紫色ですが、白色、黄色のものもあります。改良種も数多く作出されています。

また、ブラッサボラ (Brassavola)、レリア (Laelia)、ソフロニテイス (Sophronitis) 等の中で属間交配され、人工的に新しい属も作出されています。例えば、ブラッソカトレア、レリオカトレア等です。

シプリベディウム (Cypripedium)

学問的には、パフィオペディラム (Paphiopedilum) と呼ぶのが正しく、東南アジアに広く自生し、その花弁の一つが袋状になっています。渋味のある色、光沢をもち、花の寿命が長く、2か月間に及ぶものもあります。栽培が容易で、洋ラン栽培の入門に適する種類です。

シンビディウム (Cymbidium)

広くアジアに分布し、わが国に産するシュンラン、カンランと同じ属です。基部は、球茎で雄大な葉をもち、長い花茎を出して10数個の花をつけます。花の色は、赤色、桃色、黄色、白色とさまざま、花もちも大変良く、低温でも栽培できます。

デンドロビウム (Dendrobium)

アジアよりオーストラリアにかけて分布し、わが国に産するセッコクと同じ属です。太い「トクサ」のような茎の上部に多数の花をつけます。低温で栽培できます。

以上の四つの属が、わが国で栽培されている洋ランの代表的な種類で、原種以外にも多数の美しい花を開く交配種が作られています。

洋ランは、婦人の胸を飾るコサージュとして用いられたり、切花として大変ながく保ち、また鉢植のまま、その美しい花を、私たちに賞味させてくれます。

